

## アナログレコード用ラッカー盤カッティング その2

JVC マスタリングセンター

見たい聞きたい行きたいレポート 照井 和彦 JAS 事務局長

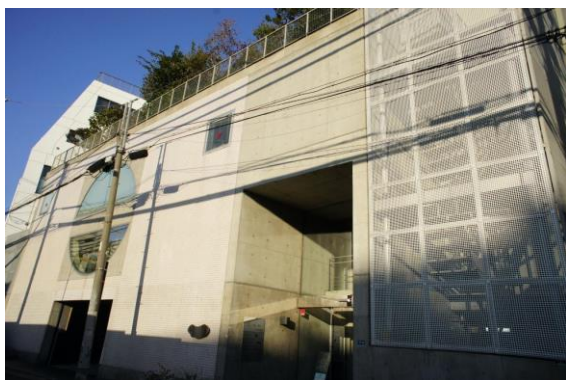
昨年9月にはソニー・ミュージックスタジオ、ミキサーズラボ、そして日本コロムビアのカッティングマシンについてレポートしました。引き続きましてJVC ケンウッド・クリエイティブメディアのマシン、そして日夜カッティング作業を進めるエンジニアへのインタビューも併せてお伝え致します。

### JVC マスタリングセンター

株式会社 JVC ケンウッド・クリエイティブメディアは代官山の静かな街並みの中に位置しており、今回の取材も大変楽しみにして最寄り駅から向かいました。

1927年創業の日本ビクター蓄音機株式会社がSPレコードを生産開始し、横浜(子安・現在はJVCケンウッドの本社ビル)に東洋一の蓄音機レコード工場を建設し、さらに1958年にはステレオLPレコードの

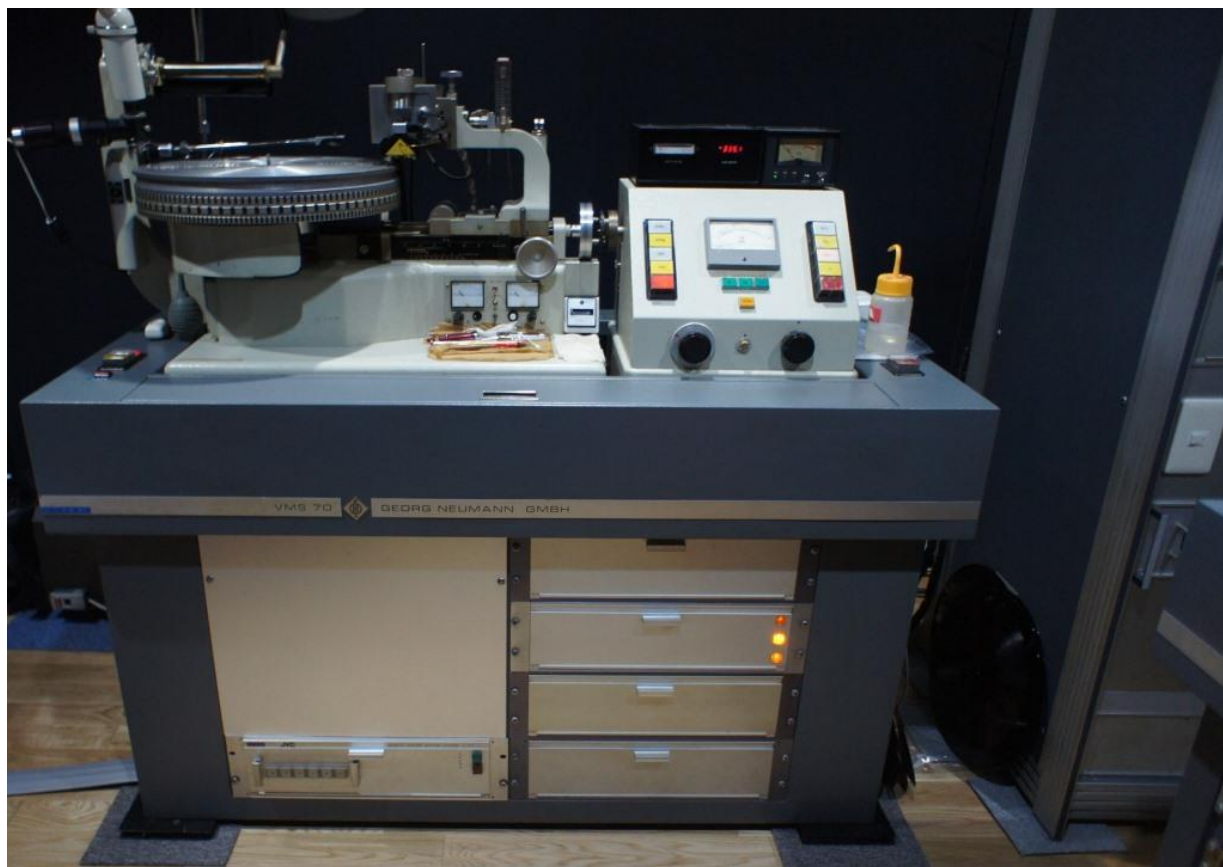
製造を開始します。このLPレコードの生産が1億枚に達した1972年にビクターのレコード会社として分離独立したのが、アーティストとして桑田佳祐、星野源、柴咲コウなどが所属する現在のビクターエンタテインメント(本社は渋谷区東)です。ビクターエンタテインメントも神宮前にスタジオ(通称青山スタジオ)を持ちますが、アナログレコードのカッティングは行って



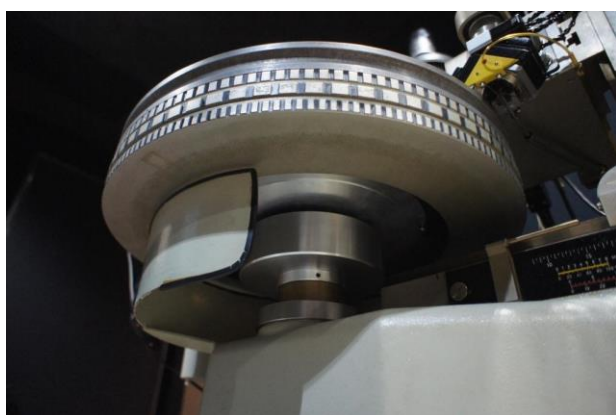
いません。

ビクター直系のJVCマスタリングセンターは2007年に日本ビクターから独立法人格としており、ここ代官山では三つのマスタリングスタジオとアナログカッティングルームを備え、国内にあるレコード各社からの業務を受託しています。

カッティングマシン



カッティングレースは NEUMANN 製の VMS70 でカッターヘッドは SX74 とおなじみの組み合わせです。ただしターンテーブルを駆動するモーターは、ビクター中央音響研究所製の強力なダイレクトドライブ方式に変更された特別仕様になっています。



(写真左) ターンテーブルを下から覗く (写真右) 本体内部に見えるモーターの下端部



(写真左) Electronic Package SAL74 (写真右) VMS70 上面の様子

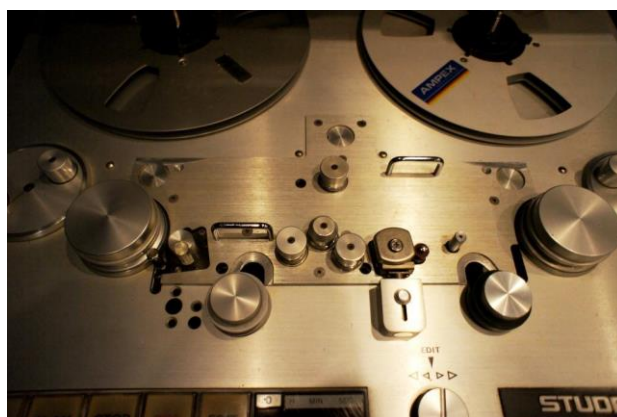
ターンテーブル奥には他と同様カッティングした後のラッカー盤モニター用のピックアップとアームも設置されていますがここ数年は使われておらず、また SAL74 も定期的なメンテナンスは施すが特別な改造などは入れず、稼働当初の仕様そのまま保持しているとのことでした。



コンソール本体は NEUMANN 製で、右手には先行用リミッターや EQなどを配置し、右手にはカッティングレベル調整などのブロックが並びますが、インストールされている EQなどは一部を除き積極的に内製（ビクター特製）のものに交換運用しているとのこと。これはビクターのハード系経

営陣が視察時に海外製のエフェクター機器へ目が留まり、その時ビクター社としてのオリジナリティを打ち出すべしとの指示があり、機材社内製作促進とスタジオでの運用を改めて見直したとのことでした。

また現在カッターヘッドは SX74 での運用ですが、ビクター中央音響研究所が過去に設計製造したヘッド CH90 によって 10 年以上稼働していた実績がありました。



(写真左) 検聴室のテープレコーダーA80 (写真右) A80 のテープパス機構を見る



(写真左) A80 をドライブする reproducer 部 (写真右) STUDER A820



(写真左) 検聴用のコンソール (写真右) ラッカー盤の検聴にも用いるプレーヤー

検聴室も案内頂いたので写真でご披露しますが、言い換えると CD マスマスタリングルームでもあります。カッティングを済ませたラッカー盤の試聴にはもっぱらこの部屋を使っているとのことでした。

## カッティングエンジニア 小鐵 徹さん



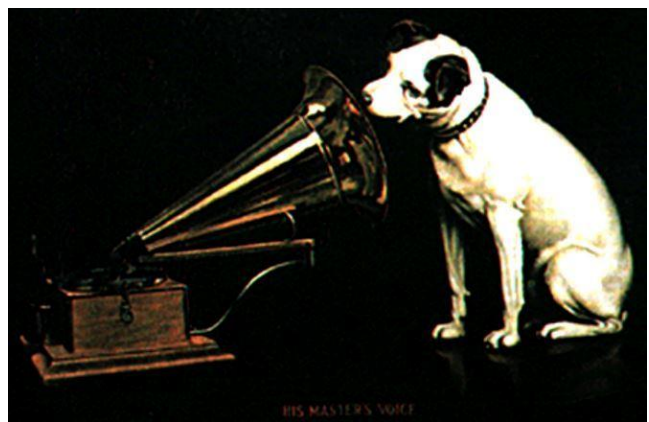
筆者が小鐵さんのお名前を初めて耳にしたのは、今は亡き伊藤 八十八プロデューサーのお話からで、ソニーとソニー・ミュージックがSA-CD（スーパーオーディオ CD）を世界に広めようという時期に、伊藤さんはその時 1 ビットデジタルマスター（DSD）からアナログ LP の製造も計画していました。と、取材にかこつけてそんなお話を小鐵さんに告げると、伊藤さんとは EW（イースト・ウィンド）のフォノグラム時代からのお付き合いとのことで、

ニューヨークのエンジニア、デビット・ベーカーの名前も飛び出して親交の深さを知ることができました。伊藤さんが小鐵さんのカッティングに立ち会う時にはカッターアンプを真空管式に指定し、カッターヘッドもウエストレックス等に交換するなど、こだわりを持って作業を見守っていたようです。

国鉄マンの父を持つ小鐵さんは反対を押し切って中学時代から好きだった音響の世界に飛び込みたいとオーディオテクニカに入社し、ここでは資材調達を担当して音響に近い仕事ではなかったものの、一年ちょっとの間に自分自身の青臭いところが抜けたと言います。そして朝日新聞にビクターのステレオやテレビ受像機の広告を見つけ、1967年ビクターに中途入社します。試用期間中は鳥取営業所で商品の出し入れを黙々とこなし、ついに正社員に成るや営業所長に猛烈にアタックを開始して、その甲斐があり子安工場に異動できました。

## カッティングエンジニアとして

そして 1973 年、小鐵さんは社内での聴感テストを受けて見事にスタジオ部門へ異動。6 年間の努力が実った瞬間でした。当時のアナログカッティングはレベル調整のみで、特に海外から送られて来たマスターテープは神様扱いとされており、音質をいじることはタブーとされていたとのことです。しかしここで洋楽の制作陣から問題が持ち上がります。



ニッパー君（ビクターエンタテインメント web より）

それは海外でプレスした LP レコード（外盤）と国内でカッティングからプレスまで施された国内制作盤の音の違いでした。どうも北米ではマスターテープの音を変えて化粧しているらしいという情報が伝わり、社内でもマスタリング（音の化粧）を始めなければいけない、という雰囲気醸造されていったそうです。しかしカッティング部門に来たものの先輩達の機材に手を触れるわけにもいかず、背中をじっとみつめるか、倉庫にマスターを取りに走るといった日々がしばらく続き、自分の部屋を与えられた時の喜びは今でもはっきりと覚えているそうです。

その頃の社内はカッティングマシンが9台9室の規模になっていました。そして小鐵さんは海外ポップスなど、エンジニアに人気のジャンルのみならず三味線など邦楽、長尺のクラシックスなども積極的に仕事をこなして、自分の引き出しを増やしていったそうです。若い人が、道草を食った、など言いますが、その道草のおかげで今では、何でもどんなことでも対処できる引き出しを沢山持っている小鐵さんは言います。



#### カッコ良い音に気付く

仕事が順調に進みだしても中古レコードを買いあさり、様々な音楽や音との出会いを求めていたある日、これは良い音だと思った音楽のマスタリングエンジニアが、当時 A&M 所属のバーニー グランドマンと気づきます。外盤と同じタイトルのマスターテープを聴き比べて（A/B 比較試聴）違いが有りすぎて、特にドラムスのキックやベースサウンドには、すごいな！との感動で、これまでの自分の引き出しの中からマスタリングに挑戦し、だんだんとコツがつかめたとのことです。

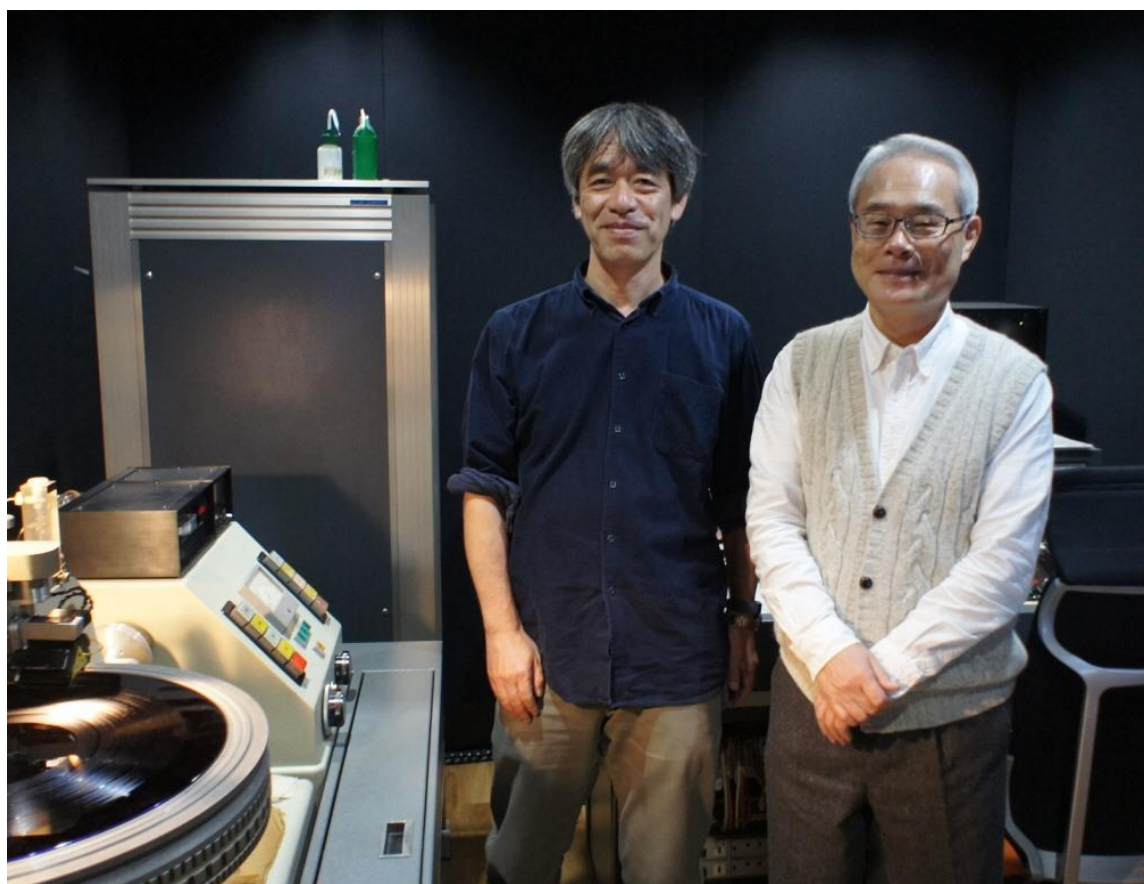
ブレイクしたのは RVC ビクターレーベルでの山下 達郎さんのアルバムを手掛けたことで、以降達郎さんのアルバムのようなサウンドで仕上げたいと業界ディレクターからの注文が殺到。また、サザンオールスターズの制作担当だった松元さんをお願いしその当時マスタリングを



海外に発注していた作業をぜひやらせてほしいと直訴し、ニューヨークのポップ ラディックのオフィスに行っているカッティング用アナログマスターテープを小鐵さんへ直送してもらい何度も挑戦。またダグ サックスなど小鐵さんから見ると殿上人とも言える偉人への挑戦は夜中に気を失いながらも作業をやり切り、ついに採用になったという教訓から、自分の器の中でベストを尽くせば良い、と気づきました。

## CD マスタリングへの挑戦

1980年代になると、アナログレコードの生産が激減してCD時代に入って行きます。小鐵さんも二年間は仕事が無くなってしまい、上司からもアナログの栄光を捨てて一から出直すつもりでやれ、とハッパを掛けられて伝手をたよりに営業に回り、テープの編集などの仕事をもらって来ます。一時はさらに異動の話もあったようですが、クラウンレコード北島 三郎のCD マスタリングがきっかけで仕事も増えていき、ザ・イエローモンキーのベスト盤で低域のグルーブ感を全面に押し出したヒップホップサウンドに仕上げたことで、制作の宗清さんに大変喜ばれました。



(写真左から) 小澤 孝浩さん (マスタリングセンター長)、小鐵 徹さん

小鐵さんは、CD もアナログ LP もお化粧が大事、と言います。また、こだわりのインダストリアルアート。例えば先に写真で紹介した STUDER A80 のテープガイドの美しさなど、必然の美しさがあり、またカッティングレース VMS70 の横姿にもほれほれするものがある。そういった思いを抱ける作業空間で毎日過ごしている小鐵さんは大変うらやましいと、心から思いました。～EW の中古盤やイエモンのベスト盤探しに行かないと～！